

## 神が許されない限り、いかなる苦難も及ぶことはない

## ヨハネ福音書7:25-36

【新改訳2017】

- 7:25 さて、エルサレムのある人たちは、こう言い始めた。「この人は、彼らが殺そうとしている人ではないか。」
- 7:26 見なさい。この人は公然と語っているのに、彼らはこの人に何も言わない。もしかしたら議員たちは、この人がキリストであると、本当に認めたのではないか。
- 7:27 しかし、私たちはこの人がどこから来たのか知っている。キリストが来られるときには、どこから来るのかだれも知らないはずだ。」
- 7:28 イエスは宮で教えていたとき、大きな声で言われた。「あなたがたはわたしを知っており、わたしがどこから来たかも知っています。しかし、わたしは自分で来たものではありません。わたしを遣わされた方は真実です。その方を、あなたがたは知りません。」
- 7:29 わたしはその方を知っています。なぜなら、わたしはその方から出たのであり、その方がわたしを遣わされたからです。」
- 7:30 そこで人々はイエスを捕らえようとしたが、だれもイエスに手をかける者はいなかった。イエスの時がまだ来ていなかったからである。
- 7:31 群衆のうちにはイエスを信じる人が多くいて、「キリストが来られるとき、この方がなされたよりも多くのしるしを行うだろうか」と言い合った。
- 7:32 パリサイ人たちは、群衆がイエスについて、このようなことを小声で話しているのを耳にした。それで祭司長たちとパリサイ人たちは、イエスを捕らえようとして下役たちを遣わした。
- 7:33 そこで、イエスは言われた。「もう少しの間、わたしはあなたがたとともにいて、それから、わたしを遣わされた方のもとに行きます。
- 7:34 あなたがたはわたしを捜しますが、見つけることはありません。わたしがいるところに来ることはできません。」
- 7:35 すると、ユダヤ人たちは互いに言った。「私たちには見つからないとは、あの人はどこへ行くつもりなのか。まさか、ギリシア人の中に離散している人々のところに行って、ギリシア人を教えるつもりではあるまい。
- 7:36 『あなたがたはわたしを捜しますが、見つけることはありません。わたしがいるところに来ることはできません』とあの人が言ったこのことばは、どういう意味だろうか。」

## 【祈りながら考えよう】

- (1) 28節で「あなたがたは知っています」「あなたがたは知りません」とありますが、ユダヤ人たちは、何を知っているが、何を知らないのですか。
- (2) 30節で「人々はイエスを捕らえようとしたが、だれもイエスに手をかける者はいなかった。イエスの時がまだ来ていなかったからである」との聖句から何を教えられますか。
- (3) 「主イエスを救い主として求めようとした時はすでに手遅れだった」ということが起こり得るでしょうか。

## 【解 説】

## (1) 不信仰なユダヤ人たちの盲目さ

主イエスは仮庵の祭りの時に、エルサレムに上り、宮の庭で教えておられた。ユダヤ人の指導者たちの迫害にもかかわらず、主イエスは教え続けておられた。これを見ていたエルサレムの住人たちは、主イエスのあまりにも毅然たる態度に度肝を抜かれて、こう言い始めた。

「この人は、彼らが殺そうとしている人ではないか。見なさい。この人は公然と語っているのに、彼らはこの人に何も言わない。もしかしたら議員たちは、この人がキリストであると、本当に認めたのではないか。しかし、私たちはこの人がどこから来たのか知っている。キリストが来られるときには、どこから来るのかだれも知らないはずだ。」(25-27節)

彼らの主張はどちらも間違いである。彼らが、「私たちはこの人がどこから来たのか知っている」と言ったのは間

違いであった。もちろん、彼らは、主はナザレで生まれたナザレ人であり、したがってガリラヤ人であると言おうとした。しかし実際は、主はベツレヘムでお生まれになり、法律上はユダ部族に属していた。そして主の母もヨセフもダビデの家系の出であった。

さらに、「キリストが来られるときには、どこから来るのかだれも知らないはずだ」と言ったのも正しくない。キリストはベツレヘムの村から出るというユダヤ人なら誰でもよく知っている有名な預言があった(ミカ5:2、マタイ2:5、ヨハネ7:42)。

こう言ったのは、指導者たちが主にしようとしていたことを知っていた、エルサレムに住むあまり教養のないユダヤ人たちであったと思われる。彼らは、20節に出て来た「群衆」とは違う。その群衆は、祭司やパリサイ人たちの計略を、全く知らなかったゆえに「だれがあなたを殺そうとしているのですか」と言った。しかし、この25節に出て来る人たちが言った言葉は全く反対であった。「この人は、彼らが殺そうとしている人ではないか」

「キリストが来られるときには、どこから来るのかだれも知らないはずだ」と言った人々の論法は次のようなものであったと思われる。

「メシヤが来られる時は、マラキ書で『主が、突然、その神殿に来る』(マラキ3:1)と言っているように突然、予期しない時に、奇跡的に来られて、人々をびっくりさせるはずである。だから、神殿で私たちの間に座っているこの人はガリラヤのナザレ出身であること、そこに30年以上も住んでいる人であることを私たちは知っているのだから、メシヤであるはずがない」と言っているわけである。

主はベツレヘムでお生まれになってから、約30歳になられるまで、ずっとガリラヤのナザレで普通の生活をしておられた。そして、約30歳になられた時、突然公の働きを開始された。それに、主イエスは、単なる人間ではなく、天から来られた神の御子であられる。

今日でも偏見を持って見ている人が沢山いる。主イエスを単なる人間だと決めつけている。一般的に「世界の四大聖人」と言われている人は、ギリシアのソクラテス、中国の孔子、インドの釈迦、そしてユダヤのイエス・キリストである。それぞれの時代、地域で、人間の精神文化に大きな役割を果たした人物である。だが、ここでは、イエス・キリストを他の三人と並列して位置づけることはできない。

イエス・キリスト以外の「三聖人」は「真理(本物)」を求め続けた求道者という点で一致している。三人の代表的な言葉を挙げると、

- ①孔子「朝に道を聞かば夕べに死すとも可なり」 ②釈迦の臨終の言葉「真理を求めてたゆまず努力し続けなさい」  
③ソクラテス「私は『無知の知』を自覚している。真理に対して無知なので、絶えず真理を求め続けている」

しかし、イエス・キリストは「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです」(ヨハネ14:6)と言っている。つまり「三聖人」が求め続けていた究極のものは「イエス・キリストご自身」だったのである。ソクラテスや孔子や釈迦と同列に置いて見ているのは正しくない。

## (2) 主イエスの主張

釈迦やソクラテスや孔子は自分が神から遣わされて来た者であるなどと言ったことは一度もないが、主イエス・キリストははっきりそう言っておられる。この7章でも、そう言っておられる。しかも、いつも静かな口調で話しておられる主イエス・キリストが、「大きな声で言われた」というのであるから、これがどれほど重要な確信に満ちたことであつたであろう。

「あなたがたはわたしを知っており、わたしがどこから来たかも知っています。しかし、わたしは自分で来たものではありません。わたしを遣わされた方は真実です。その方を、あなたがたは知りません。」

わたしはその方を知っています。なぜなら、わたしはその方から出たのであり、その方がわたしを遣わされたからです」(28-29節)

この最初の文章である「あなたがたはわたしを知っており」と訳されたところは、どうやら主が皮肉っぽい口調で言っておられるようである。「あなたがたはわたしを知っており」と言っていますが、本当に知っているわけではないというニュアンスが伺える。

そして主イエスは、ご自分が天の父なる神から出た者、つまり神の御子であり、父なる神から遣わされて、天からこの世に来たのだということを、はっきり主張しておられる。だから、「人々はイエスを捕らえようとした」のである。それほどまで、この主の御言葉は彼らの意表を突くものであった。

## (3) すべてを支配する神の御手が、敵をも支配している

主を信じないユダヤ人たちが、「イエスを捕らえようとしたが、だれもイエスに手をかける者はいなかった。イエスの時がまだ来ていなかったからである」と記されている。彼らは主を害そうとの思いがあった。しかし上よりの見えない抑制のために、彼らにはそうする力がなかった。

この箇所には、心にしっかりと留めておかなければならない深い真理の宝庫がある。これらの真理は、主がその苦しみの一切を自発的に、ご自身の自由意志で受けられたことを、私たちに明白に示している。

主が十字架につけられたのは、それを避けることができなかったからではない。主が死なれたのは、ご自身が死を

避けることができなかつたからではない。

ユダヤ人も異邦人も、パリサイ人もサドカイ人も、アンナスもカヤパもヘロデもポンテオ・ピラトも、誰ひとりとして、上から力が与えられない限り主を害することはできなかつた。彼らがしたことはすべて、支配の下に許しを受けて行ったことであつた。

キリストの十字架での死は、三位一体なる神が、永遠のご計画によって定めておられたことであつた。主の受難は、神が定められたその時が来るまで起こり得なかつた。これは私たちには大きな神秘であるが、真理である。

いつの時代にあつても、キリストのしもべはこの教義を心に刻みつけておき、必要な時、いつでも思い起こすべきである。これは「神の人にとって、甘く、快い、ことばに言い表せない慰めに満ちた」ものである。

キリスト者は、神様が一切の時と一切の出来事を支配しておられ、神の許しなくして何事も起こり得ない世界に住んでいることを決して忘れてはならない。髪の毛の1本1本に至るまですべて数えられている。悲しみ、病、貧しさ、迫害、どれ1つをとってみても、神がよしとされぬ限り、決してその人に及ぶことはない。

キリスト者は1つ1つの苦難に向かって大胆に、「おまえは、もしその力が上から与えられるのでなければ、私に対する力など全くないのだ」と言えるのである。

だから確信を持って大胆にわざになし終るまで死ぬことはない。父が永遠より定められたこと以外、ご計画に従つたこと以外、何事もこの世で起こらないと悟ることは、穏やかで平安な、満ち足りた生活を送る大事な秘訣の1つである。

**(4) 群衆の中の多くの者たちが主を信じた**

この時、群衆の中の多くの者たちが主イエスを信じた。そして、彼らはこう言った。「キリストが来られるとき、この方がなされたよりも多くのしるしを行うだろうか」

この言葉は、主がガリラヤでなされた多くの奇跡をよく知っており、また、主の宣教を知っていた人々が語つたと思われる。エルサレムとその周辺では、あまり奇跡はなされていなかったと思われるので、この言葉がエルサレムに住んでいる人々による可能性はない。

これらの人々によって提示された疑問は、次のように説明される。「誰か、この人が示した以上の証拠をもって、自分がキリストであると示すことができますか。たといその人が奇跡を行ったとしても、この方以上に偉大な奇跡を行うことはできないでしょう。とすれば、私たちは何を待っているのですか。なぜこの方をキリストであると認めないのですか。」

**(5) 不信仰な者たちがいつの日か行き着く悲惨な結末**

主は不信仰なユダヤ人たちに、「あなたがたはわたしを捜しますが、見つかることはありません。わたしがいるところに来ることはできません」と言われた。

これらのことばは、下役たちと彼らを遣わした人たちの両方に宛てて預言的意味を込めて言われたと思われる。「遅すぎるという日が来ます。その時、あなたがたは熱心にわたしを捜すでしょう。そしてわたしを拒んだことを嘆くでしょうが、その時は遅すぎます。あなたがたの訪れの日は過ぎ去っています。だから、あなたがたはわたしを見つけないでしょう。」

真理を見いだした時はもう遅い、ということがある。箴言には次のように書いてある。「そのとき、わたしを呼んでも、わたしは答えない。わたしを捜し求めても、見出すことはできない。」(箴言1:28)

不信仰なユダヤ人たちのような罪を犯さないよう注意しよう。エジプトのパロ王やイスラエル初代の王サウル、イスカリオテのユダたちはみな、「私は罪を犯しました」と言うことができた。しかし、遅すぎたのである。

神はあわれみ深いお方である。しかし、それが提供されている時には限度がある。福音を聞いた今を取り逃してしまつと、もう1度そのチャンスが訪れてくるかどうか、だれもそれを明言することはできない。

**(6) 主の言葉を理解できない**

すると、ユダヤ人たちは互いに言った。「私たちには見つからないとは、あの人はどこへ行くつもりなのか。まさか、ギリシア人の中に離散している人々のところに行って、ギリシア人を教えるつもりではあるまい。『あなたがたはわたしを捜しますが、見つかることはありません。わたしがいるところに来ることはできません』とあの人が言ったこのことばは、どういう意味だろうか。」(35-36節)

ユダヤ人たちは主のことばの意味が理解できなかった。主が天に帰られる、という意味だとは思わなかつた。もしかすると、ギリシア人の間に離散しているユダヤ人のための伝道旅行に行くのかもしれない、そして、ついでにギリシア人たちにも教えようとしているのかもしれない、と考えた。

彼らは主のことばに驚きを隠せなかつた。主を求めても主を見つかることができない、というのはどういう意味なのだろう。我々がついて行くことができない所、とはいったいどこなのか。しかし、彼らは主イエスを受け入れられなかつた。

**ヨハネ福音書によるイエスの旅(紀元30~33年)**

[バイブルワールド「地図でめぐる聖書」(いのちのことば社)より複写]

